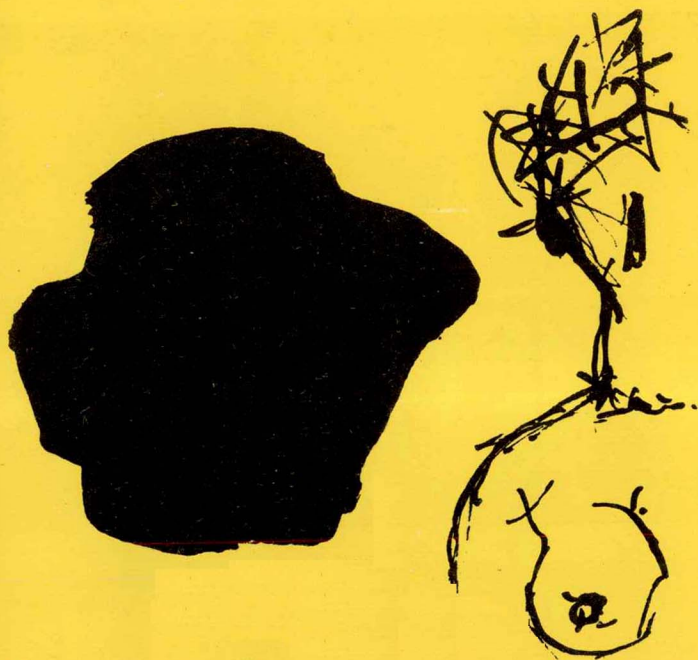




悪魔と天使の間

池田みち子



東方社版

悪魔と天使の間

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十九年六月五日発行

定価三三〇円

著者 池田みち子

発行者 石渡磨須子

製版者 内田柳次郎

東京都文京区高田豊川町六〇番地

発行所 東方社

振替東京五七七七四番
電話大塚(941)一七八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

長篇小説

悪魔と天使の間

池田みち子

装
幀

須
田

壽

四時半になると、間島雪夫はスケート場をあがつた。

これから三十分は、氷の手入れをするために休憩である。雪夫の滑走券は、五時から始まるスケートもすべられるが、そうすると帰りがおそくなる。高校二年の雪夫は、学校をさぼつたのではない。先生が休みで授業がなかったのだ。ロッカーをあけて靴と靴を出した。それからスケート靴を返して、

「寺島ア、僕、もう帰るよ」

と後を向いて言つた。寺島は三人づれできていた。一人は寺島の同級生らしかつたが、もう一人は女である。

同級の女の子が、或は喫茶店の女給かなにかなのか、雪夫にはわからない。雪夫と寺島は家が近くで同じ中学校を卒業したが、高等学校は別々であつた。雪夫のクラスも男女共学だが、雪夫は交際している女はひとりもなかつた。今日スケート場へきて偶然寺島に出会つたのだが、真赤な上衣を着た可愛いらしい少女をつれている寺島を羨しい気がした。

「俺も帰ろうかな、ちよつと待つてろよ」

と寺島は言い、ロッカーへ靴と靴をとりに行つた。

このスケート場は、新宿の映画館の四階にある。二人

はスケート場専用のエレベーターで下まで降りた。そこへ出てから、

「さつきの女、同級生か？」

「そんなんじゃない、ズベ公さ、僕と仲よくしてたんだが、倦きちやつたから、彼奴に譲つたのさ」

と、寺島は事もなげに言つた。

「譲るつて、そんなことができるかい？ 相手は人間だよ、親戚から犬を譲つて貰つたけど、鎖をとくと、すぐ帰つてしまふんだ、何度つれてきても帰るんで、あきらめたよ」

寺島は唇を歪めて、さも軽蔑したらしい微笑を浮べて、

「女なんて、わけないさ、犬より簡単さ、映画館の中で手を握つてみる、半分はじつとしてるし、その中の三分の一は、握りかえすよ」

「そんなことして、若し『きやア！』つて叫んだら、大変じやないか、警察へ突き出されるだろう」

寺島はまた唇を歪めて笑つた。そして、

「お前、女を知らんな！ 女なんて、そんなもんじやない」

「そうかなア」

と雪夫は信じられない顔である。それにしても、中学

時代の寺島は、陽気で騒々しい、無邪気な少年だつた。いつの間に、映画館で女の手を握つたりするようになったのだらう。こんな寺島を「随分変つたなア」と雪夫は羨望と軽蔑の眼で眺めた。

「僕の言うのを、信用しないらしいな、見てろ！」

そう言うとき寺島は周囲を見まわした。映画館や喫茶店の並んだ新宿の盛場だから、丁度似合う年頃の少女はいくらでも歩いてゐる。が、髪を赤く染めたり、口紅を濃くぬつたりしているような少女は齒が立たない。そういう少女は、喫茶店の女給や映画館の案内嬢だから、ひと月千五百円の小遣いしか貰えない高校生では相手にしてくれない。若し相手にしてくれたとしても、お茶を飲んだり映画をみたりに金がかかつて、高校生の財布では間にあわないに決つてゐる。電車通りを渡つたところで、寺島は雪夫の肩をこづいた。見ると、ひとりの少女が向うから歩いてきた。紺サージのひだの沢山あるスカートへ白いセーターを清潔に着ている。パーマメントのない髪を首のところで切り揃えているが、白粉気のない顔は、目鼻立ちが大大で、大きな眼差が印象に残つた。背も高いし、セーターの胸がはち切れそうである。寺島は廻れ右をすると、小走りに少女へ追いついて並んで歩き出した。見ていた雪夫は寺島の実行力に圧倒されてしまつ

た。少女は都電に沿つて、駅とは反対側へ歩いた。並んで歩いている寺島は、いつたい何を話しているのだらう。少女の方を向いて、唇を動かしたり、微笑したりしている。少女も何か話しているらしく、ときどき寺島の方を向くので、横顔が見える。雪夫は、彼等から十米ぐらいおかれて、従つて行つた。きつと寺島は、清潔で魅惑的な少女をさそつてくれて、三人で映画を見るとか喫茶店へ入るとかするのだらう。雪夫は母ひとり息子ひとりの家庭なので、母がおそくなると、母親は機嫌が悪い。が、母に叱られるぐらい今は何でもないことに思える。が、物の前まで来たとき、寺島が、急に後ろをむいた。瞬間雪夫は自分と呼ぶのかと思つたが、寺島が猛烈な勢いで走つてきた。そして雪夫のそばをすぎながら、

「逃げる！」と言つた。雪夫は、わけがわからないままに、寺島の後から走り出した。何しろ新宿の電車通りである。人に突き当つて「馬鹿野郎！」とどなられると、こんどは、どなられたことが怖しくて無我夢中で走つた。寺島は左に折れ右に折れしから、やつと立止つた。苦しうに、はアはア息を吐いている。

「どうしたんだよ」

「始めはね、うまくゆきそうだったんだ、お茶のみにゆこうつて言つたんだ。いま急いでる、つて言うんでね、

ちよつとぐらいかまわないだろう、なんて、押しの一手でやつたのさ、女は嫌でもなさそうだったのに、急に怒り出したんだ」

そこでちよつと言葉を切つてから、

「ああ、不味いこと言つちやつたよ、大変なことになつたよ、女が僕を信用しないと困ると思つたんで、桜泉高校二年の寺島だつて、言つてしまつたのさ、女の親が学校へとなりこんでくるんじゃないかなア」

と、さつきの元氣はどこへやら、青い顔をしている。

寺島を怒つた少女は岡村雪子である。彼女は韋駄天走りに逃げてゆく寺島をみて、さも面白そうにくつくつ笑つた。それからいそぎ足に番衆町の方へ歩いた。都電が回る角に交番がある。そこから斜めに見渡せる自転車屋の横丁のクリーニング屋と荒物屋の間の三尺路次を入つた片側に、マッチ箱を立てたような小さな二階建が四軒並んでいる。岡村雪子は、右から三軒目の伊原という表札のある玄関の戸へ手をかけたが開かないので、

「いく枝さん、私よ、雪子よ！」

呼んでから表戸をゆすぶつた。留守かな、そんな筈はないと思つて、表戸の硝子が少しこわれたところから背のびをしてのぞくと、いく枝の靴が見えた。「いく枝さ

アーン」ともう一度呼ぶと、階段を降りる足音がして、玄関があいた。

「早く早く」

と、いく枝は雪子を抱きこむようにして、急いで玄関の内鍵をしめた。それから、

「あのね、ガス会社や放送局や、何だかわからないけど、いつばい借金取りが来るの、見つかる困るから閉めておくのよ」

階下は台所に便所に四畳半が一つだけで、二階は六畳一間である。何日も掃除をしないざらざらの階段を、いく枝の後から雪子がついてあがつた。二階には高校生の佐竹と、今年中学を出たばかりの浦上が並んで寝そべっていたが、雪子をみると、

「雪ちゃん金もつてないか」

といきなり佐竹が聞いた。

「お金なんかないわ」

雪子は彼等の頭のところへ足を投げ出して坐つて、

「あんたたちが来ているの知らなかつたわ」

「靴をね、かくしておくのよ、硝子がこわれてるから見えるでしよう」

といく枝が言つた。この家はいく枝の兄の家である。この家にとつて、いく枝は全くの余計者であつた。腹違

いの兄は楽國のドラムをたたいている。兄の情婦はキャバレーの女給で、いく枝の面倒を親切にみてくれたが、兄は親切な女給を追い出して、二日目に別の女を引入れた。その女は二十二歳のストリッパーで、いく枝の面倒をみるどころか、まるで女中のようにこき使った。ひと月前、兄とストリッパーは、ドサ廻りの一座に加わった。いま九州を巡業している。旅に出るとき兄は、家賃より別に五千円いく枝に渡して「自分で飯を炊いて食えよ。」

一日百円あれば食えるだろう」と言つた。それでいく枝はその通り実行した。お米がある間は百円で充分食べられたが三日前から米がなかつた。それに一人でいるのがつまらないので、友達をつれてきたのが始めて、いつの間にかここが、みんなのたまり場になつた。

「ね、まだ仕度しないの？」

と雪子が言つた。渋谷に六百円で行けるホールがある。今日はダンスをしに行く約束だつた。雪子はダンスが好きである。彼等がいちばん苦勞するのは、どうすれば、未成年でなく見えるかと言ふことだつた。雪子は、ストリッパーが残したスカートを借りた。ひだの多いスカートを、タイトスカートにはきかえると、身体が大きいので結構大人にみえた。いく枝はパーマネットをかけているので、お化粧をすれば大丈夫である。変装するのに、

浦上がいちばん苦勞した。いく枝の兄の上着があるが、大きすぎて手が半分かくれてしまう。それで袖口のところを内側に折りこんで着たり、ときには、寒いのを我慢して、学生服をぬいで下着のセーターだけになつたりした。雪子は日比谷の音楽会へ行くと言つて家を出た。それで今夜は、音楽会が終る時間には家へ帰らなければならぬ。

「ねえ、早く仕度しようよ、あのスカート貸して」と雪子がまた言つた。

「まだ早すぎるよ、おそくからが面白いよ」

と佐竹が言つた。

「だつて、私は、あんたたちみたいに、ゆつくりしてられないもの」

「ほんとにダンスどころじゃないのさ、みんな腹べこなのさ、朝飯を食つただけさ」

「どうしたのよ」

と雪子がびつくりして聞くと、いく枝が言つた。

「昨夜ね、斎藤さんやなんかみんな一緒にお酒呑んだの、最初、お酒買つてきて、うちで呑んだけど、酔うと、みんな気が大きくなつてね、そとへ出たの、歌舞伎町のイブセンというスタンドへ行つたのよ、そして、二千円もお金をとられちやつたの、でも面白かつたわ、

気がついたらもう十二時すぎでしよ、十二時すぎで、酔っぱらつて家へ帰ると、叱られるでしよ、だから、この人たち、昨夜ここへ泊つたのよ」

「そう！」

雪子は自分を標準に判断して、酔つた二人の少年といく枝の間に肉體交渉が結ばれたのは想像もしなかつた。

「眼がさめたらね、誰もお金持つてないの、三人あわせて二十八円よ、丁度屑屋が来たんで新聞売つたら五十円あつた。アンパン買つて三人で食べたの」

雪子は仕方なしに持つていた三百五十円を出した。これは、音楽会の入場券を買うと言つて母親から貰つた金である。自分では、渋谷のホールの入場料にするつもりだつた。二人で六百円だから、自分の分は三百円である。

「何を食べよう、雪ちゃんも食べるだろう？」

「私はいわ」

雪子はリズムにのつてステップをふむ楽しさと、異性にふれあう快さで、ダンスのためなら何を犠牲にしても惜しくないと思つている。それで、踊りにゆかないのなら、ほんとうに日比谷へロカビリーを聞きに行つた方がよかつた、と思つた。雪子の三百五十円を真中へおいて雪子をのけた三人が相談を始めた。いく枝は、今日は

御飯を一粒も食べていないから、百円の天井を三つとつて、五十円は明日のために残しておいてほしいと言い、佐竹と浦上は、いちばん安いうどんかけを食べて、残りで酒を買おうと言つた。二人共、うちをあげたのは始めてである。帰ればどんなに叱られるだろうと思ひ、口には出さなかつたが、外泊したのを後悔していた。それでは心の中のもやもやを酔つて忘れたかつた。いつまでもまとまらない相談を聞いていた雪子が言つた。

「ここへくるとき、高校生がしつこく従ってきたわ、お茶飲みにゆこうつて誘うの、あんまりうるさいんで、あなたの家何処よ！ つて言つたら、逃げちやつたわ、桜泉高校の寺島つて言うのよ」

知らない男につけられたのを自慢する気持もあつたが、御飯食べたり酒を呑んだりするのはつまらないから、せめて音楽喫茶へ行きたいと思つて言つた。コーヒー代があればレコードを聞きながら何時までもねばつていられる。

「桜泉高校だつて？ 女をつけるなんて生意氣だよ」

と佐竹が言つた。

「名前、なんて言つたつけ、寺島か、のしてやろうか」「やつちやおう」

と、佐竹と浦上がいきり立つた。そこへ「いくちや

ん、斎藤だよ」と表から呼んで斎藤が来た。斎藤は兄と二人でアパートにいた。兄は運転手で、一日おきに家をあける。昨夜は兄が留守なので、酔っぱらつておそく帰つても怒る人がなかった。斎藤は、「金ないか」と佐竹に聞かれると、五百円出して、

「佐竹、お前のお母さんが、君が帰らないから心配して、今日、僕のアパートへ聞きに来たよ」

「それで、何て言つた？」

「まさか酒を呑んでおそくなつて、女の家へ泊つたとは言えんだらう、知らないと言つたよ」

「もつとうまく言つてくれればいいのに」

「うまくなんて言えんじやないか、帰つたらおこられるぞオ」

と斎藤は面白そうにやにやにした。すると佐竹は、

「俺、もう帰らん、二、三日帰らなければ、死んだと思つて心配するだらう、死んだと思つてから帰れば、叱言は言わんだらう」

とわざと肩をそびやかした。佐竹の家庭は厳格だった。それで叱られるのが怖くて帰る勇気がないのだ。それで、

「いくちやん、金ができたから、早く酒買つて来いよ」
「俺が買つてくる」

と斎藤が立ちかかると、
「あんたじやわからないわ」

といく枝が言つた。天井をとると、出前持がとどけに来たり、取りに来たりするのがうるさいから、寿司を買つてくると言つた。すると佐竹が、もつと安いものでいいと言ひ、いく枝は、

「御飯食べたいから、握り飯買つてくるわね、雪ちやん一緒にこようよ」

と雪子をつれて出て行つた。

「雪ちやん、あんた今晚うちへ泊らない？」

いく枝は新宿二丁目の握り飯食堂へゆく道すがら言つた。

「泊れば、ゆつくり遊べるじやないの」

「私、音楽会の終る時間には帰るわ、私のうちとても厳格なもの」

「叱られるぐらい何でもないわよ、だまつて聞いていれればいいでしょ」

「叱られるどころじやないわ、ひと晩でも帰らなかつたら、きつと警察を頼むわ、いく枝さんは自分が自由だから親のうるさいのがわからないのよ」

するといく枝は怒つた顔になつた。雪子泊らせて、

桃色遊戯の仲間にひき入れて、共犯者にしたいのだ。

女たちが留守の間、佐竹と浦上は、昨夜のことを齋藤へ話した。性に経験のない齋藤は、話を聞いただけで興ふんしてしまい、

「俺、明日の晩、此処へ泊るよ、今夜は兄貴が家にいるから駄目だ」

と言った。そして、

「雪ちゃんも明日泊らないかなア」

齋藤は雪子を好きであつた。

「雪ちゃんを追いまわしている男がいるんだ、桜泉高校の寺島つて奴さ」

「よし、そんな奴、ただじやおかんぞ！」

と、齋藤が言つた。

握り飯と酒を買つてきてから、この小さな二階家はどんちやん騒ぎになつた。いちばん酔つたのは佐竹である。古いレコードをかけて、男と女が組みあつて、身体をゆすぶりながら踊つた。

柱時計が九時半になると、齋藤が、

「俺、帰るよ、兄貴がいるから」すると浦上が「俺も帰る」と言つた。

「どうして帰るんだよ、叱られに帰るようなもんじやないか」

と佐竹が浦上へ言つた。

「うん、どうせいつかは叱られるんだらう、だから今夜叱られるよ、俺が、今夜うちへ帰つて、明日、米を持つて来てやるよ、うちには職人が大勢いるから、米を盗んでもわからないよ、出来たら金も持つてくるよ」

といく枝へ言つた。

「ほんとに持つてきてね、私、お金はないし米もないし、困つてゐるんだもの」

「みんな帰るから私も帰るわ」

と雪子が言つた。

「嫌だな、急にみんな帰つてしまつて」

そう言う佐竹は、残つていた二級酒をまるで水を呑むぐあいにがぶがぶ呑んだ。呑んだ瞬間に、倒れるように横になつた。そんな佐竹をいく枝は物憂く眺めながら「佐竹さんも一緒に帰ればいいのに」と言つた。いく枝は、佐竹が泊つてゐるところへ、若し兄夫婦が帰つてきたら困ると思つた。が佐竹は眠つたふりを装つた。

みんなが帰ると、佐竹は「いくちゃん、こつちへおいでよ」と、右腕をさしのべた。いく枝は、断るのは悪い氣がして、さしのべた腕を枕によりそつた。

翌日、いく枝は浦上が来るのを終日待つたが、浦上は

来なかつた。

昨夜浦上が帰ると、晩酌をして酔つていた父親が、

「誰だ、行一か、行一、ここへ来う！」

と浦上を呼びつけて、

「仕事も覚えねえで、何だ、女遊びばかり憶えやがる！」

とどなつた。若い職人が、同じ部屋でテレビをみていたが、それを聞くと、みんなくすくす笑い出した

「何でエ、何が可笑しくて笑いやがる、とんちき奴！」

と、こんどは職人を怒りだした。それだけで叱言は終つたのである。だが、今朝早く、「行一！ 遊ぶが能じやねえ、仕事を覚えろ！」と、父親は、浦上をたたき起して、アパートを建てかけている現場へ、無理に浦上をつれて行つた。それで浦上は来れなかつたのだ。

浦上は来なかつたが、代りに斎藤がきた。斎藤は泊るつもりできたのだ。

「嫌アね、あんたたち！」

少年たちは若い生命力を持て余していたし、欲望を満足させることに夢中だが、いく枝はそうではない。酔つて泊めたことが弱味になつて、少年たちの言いなりになつてゐるしかないような、投げやりな気持ちにさせられていた。それで、「早く兄さんが帰つてきて、みんなを追払つてくれればいい」と、心の中では少年たちを持て余

していた。

いく枝と、いく枝をとりまいた少年たちは、金があれば、映画を見に行つたり、コーヒーを飲んだりした。だから、浦上も斎藤も、自分の家から、金やものを持出した。

佐竹はあれきり家へ帰らなかつたが、夜半にふと眼がさめると、両親がさぞ心配しているだろうと、涙があふれた。それに、此処の家でもだんだん佐竹は居辛くなつていた。浦上や斎藤が運んでくる金で、佐竹が養われてゐるからだ。金が欲しいな！ と思つたり、家へ帰りたいな！ と思つたりした。それに、同じ下着をいつまでも着ているので、汚れた下着は気味悪るかつた。下着が汚れるのと同じように、佐竹の心は荒れたようにみえた。

佐竹の両親は、心当りを探し尽した末に、警察へ搜索願を出した。

2

「いく枝さん、僕だよ」

と浦上の声がしたので、いく枝はいつものように玄関をあけた。玄関の内鍵を閉めた瞬間、また靴音がして「今日わ、電燈料をお願いします」と言つた。まだ玄関

に立つていたいく枝は、息をひそめた。そして、浦上の方をむいて、にやつと笑った。集金人は表戸をゆすぶつて、

「伊原さん、留守ではないでしょ。今、人が来たのを見ましたよ」

いく枝は、もう笑うどころではなかった。

「居留守を使つちや困りますねえ」

が、今更、戸をあけて断りを言うわけにはゆかない。

集金人も腹を立てたと見えて、表戸を乱暴にゆすぶつた。やつと立去つてから、いく枝は二階へあがつた。嫌になつちやうわ」

「かくれないで、金がないと言つて、ちゃんと断つた方が簡単だよ」

と浦上が言つた。

「借金の断りなんて、嫌だわよ、うちにいると、また誰か来るから、そとへ出ましようよ」

「俺、今日は金がないよ」

と浦上が言つた。佐竹は、二人の話をだまつてきいていた。そこへまた「いくちゃん、僕だよ」と言つて、斎藤がきた。

いく枝は佐竹へむいて、

「あんた、玄関をあけてよ。電燈屋が見ていると困るか

ら。若し見られたら、ここの家の人は留守だつて言つてよ」

それで佐竹は戸を開けて降りた。斎藤は紺のズボンの上へ黄色いセーターを着ていたが、二階へあがつてくると、浦上の方へ言つた。

「お前の家に、今日、佐竹のお母さんが来なかつたか」
「来ないよ」

浦上はこんどは佐竹の方へむいて、

「君の家でね、警察へ捜査願を出したらしいよ、今日、お前のお母さんがきてね、お前のことをいろいろ聞くんのだ。この前、知らないと言つたから、こんども知らないつて言つたよ。お母さんが泣くんだよ。俺、お母さんが可哀想になつて、此処にいるのを言つてしまおうかと思つたよ」

「それで言つたのか」

佐竹は、此処にいるのがわかつて、つれに来てくれた方がいような気がした。浦上や斎藤がいるときはまだよかつたが、いく枝と二人きりになると、中年の倦怠期の夫婦のように、気不味い顔で向きあつた。

いく枝がそばから、

「佐竹さん、おうちで警察へとどけたんでしょ、警察で此処がわかると、私たちみんな引っぱられるわ。うちに

帰った方がいいわよ。ねえ、帰んなさいよ」

佐竹はうつむいていたが、数秒すぎると顔をあげて「俺、帰るよ」と言つた。そしてつそり立上つた。佐竹が階段を降りるのを誰もとめなかつた。いく枝が斎藤へ「あんた、鍵をしめてきて」と言つたので、斎藤は佐竹を見送る格好で階下へ降りた。佐竹は靴をはきながら「うちへ帰つて説教されるのが憂うつだよ、金さえあればなア」と言つた。佐竹の肩のあたりが淋しそうである。が、斎藤はだまつていた。

いく枝は佐竹がいなくなると、佐竹の悪口を言い始めた。

「佐竹さんなんか、お家がちやんとあるんだから、家へ帰ればいいんだわ。叱られるぐらい、何でもないじやないの、昨日、蚊帳と魔法瓶を屑屋に売つたのよ。心細いと言つたら、ありやしない」

いく枝は、兄の帰りを毎日待っているが、兄の俊一からは手紙ひとつ来ない。俊一は五十日間の予定で九州巡業にでたのだが、さんさんの不入りつづきで、鹿児島島の果てまでたどりついたところで、一座は解散したのである。その上、女房のストリッパーが一座の若い俳優と手に手をとつてずらかつたこともあつて、俊一は傷心の身

を鹿児島島の小さな酒場に住みこんで働いていた。おそらく東京の空を夢見ているだろうが、腹違いの妹のことよりも、帰りの汽車賃を早くつくりたいと眼の前のことに追われていた。

「いくちやん、家の中にいると、つまらんことを考えるから外に行こうよ」

と斎藤が言つた。そして、

「僕、百二十円持つてる、コーヒー飲めるよ」

コーヒーが飲みたいのではない。うす暗い、喫茶店の類魔の雰囲気が好きなのだ。だから、三人で六十円のコーヒーを二はいでよかつた。いく枝はうなずくと、赤い塗の姫鏡台を部屋のまん中へ出して化粧を始めた。口紅を塗りながら、

「口紅がもうないわ」

と心細い顔になつた。

「口紅か、口紅なら俺が持つてきてやる、おふくろのがあるよ」

と浦上が言つた。四十四歳の棟領のおかみさんは、使いかけの口紅がなくなつても、まさか、息子が盗んだとは想像もしないだろう。顔を鏡へ近づけて、まゆ墨をひいていく枝を眺めながら、斎藤が言つた。

「うちの兄貴、昨日バチンコ屋でピースを三十も稼いで

きた、どの台にしようかと台を見ながら歩いていたら、つまづいてよろめいたんだつて。受皿へ玉が山盛りになつてゐるのへよろめいた拍子に手をついて、受皿の玉がこぼれたそうさ。うちの兄貴はあわてて、こぼれた玉を拾つたんだつて。拾つて返すつもりだつたが、ほかの人も拾うだらう、みんなが拾つてゐるところへ、玉の持主が帰つてきて、大声で怒り出したつて。それで兄貴は怖くなつて、拾つた玉をポケットへ入れて、すつと逃げたつて。拾つた玉でパチンコしたら、どんどん玉が出るんだつて。ピース三十なら九百円だらう、拾つた玉でちよつとした小遣い稼ぎさ」

「ときどきいるなア、受皿に玉を山盛りにしてゐる人が」それから三人は賑やかにしゃべりながら外へ出た。家にいる間は、鍵をかけるが、そとへ出るときはかけなかった。南京錠がこわれたからだ。

彼等は獐犬のような敏感さで、どこの喫茶店が具合がよいかを嗅ぎつけた。金もないくせに三時間でも四時間でも頑張る彼等は、あまり喜ばれる客ではない。テーブルが二十もあるような大きな店では、一つ位テーブルがふさがつても被害のパーセンテージが少ないので、嫌な顔をされないですむ」

また、小さな店でも流行らないところは、人がいれば

圓の役割を果すので嫌われずにすんだ。いく枝たちが近頃行くのは、電車通りの終点に近いテルミーという喫茶店である。三人は賑やかに歩きながら偶然パチンコ屋の前を通ると、言いあわせたように顔を見あわせた。すると「ひとつやつて見るか」と言つて浦上が先に入つたので、後の二人もその後へ続いた。三人は一列になつて、店内を、人の背と背の間をかきわけながらひと廻りしたが、受皿にこぼれるように玉が入つてゐる台はひとつもなかった。「ちよい、馬鹿にしてやがる」と浦上が言い、ぞろぞろ店を出た。二軒目のパチンコ屋では、会社員らしい若い男が景気よく玉を出してゐた。が、受皿に玉があふれそうになると、ごつそりすくつて、自分のポケットに入れてしまつた。二軒目のパチンコ屋を出てから、「受皿に玉がたまつて、人がいないなんてことがあるかしら」

といく枝が言つた。

「あるさ、玉がこぼれるほどたまると、途中で煙草に代えるよ。ポケットにしまわないで、箱を借りにゆくからね」

彼等は金が欲しかつた。それで、テルミーの前を通りすぎて、次々にパチンコ屋へ入つた。十軒目のパチンコ屋で、おあつらえむきに、玉のいっぱい入つた受皿があ

つた。しかも受皿の前に人はいない。が、両隣りの台も空いているので、玉のいつぱい入った受皿が、ひどく眼立つて見えた。浦上、いく枝、斎藤という順序でその前を何もしないで通りすぎた。店を出てから斎藤が言つた。

「どうしてやらなかつたんだ。前の二人が行きすぎたから、誰か見ているのかと思つて俺はやらなかつたんだ」
「私ね、玉をつかもうと思つたけど、泥棒は初めてでしよ、手がふるえちやつた」

といく枝が言つたので、三人は声をあげて笑つた。

「何かもつとうまい方法ないかな」

「千円札がそこらへ落ちてないかなア」

と、浦上はおどけた格好で、足元を眺めた。

「ねえ、パチンコの玉はかつばらつても、お金にならないでしよ、かつばらつた玉で、パチンコして、斎藤さんの兄さんみたいにうまくゆけばいいけど、私たちパチンコ上手じゃないもの、みんなとられるかも知れないわ」
いく枝が真中になつて並んで歩きながら話した。こんな盛り場では、歩きながらたとえ人殺しの相談をしても誰にもあやしまれないですむ。

「だからね、もつとましなものねらいましようよ、人がごちやごちやいれば、少し気をつけてやればわかりやし

ないわ」

いく枝はそう言うと、来た道を引返した、二人の少年はいく枝が何をねらつてゐるかわからないまま従いて行つた。三共というパチンコ屋のさき隣りに「改築につき店仕舞、大安売り」と書いた洋品店があつて、満員電車のように人が集つてゐた。いく枝は店の方を眼でさしてから、いいでしょ！　と言うように、少年たちの顔を見た。そこは男物専門の洋品店だから、男も女も集つてゐた。いく枝は自分が先に店へ入つた。百円均一、三百円均一という風に、台が別々になつていて、いちばん高いのが千円均一だつた。千円均一は、セーター、ワイシャツ、ズボンなどである。最初はちやんと並べておいてあつたのだらうが、台の周囲にぎつしり人が集つて、あつちから手を出したり、こつちから手を出したり、ひとつのセーターを両方からひつぱつたりするので、台の上は人の手ばかりで、何が何処にあるのかわからない。それで、先ず何でもひつぱり出せる品物をひつぱり出してみて、それが気に入らなければ、またほかの品物をひつぱり出すしかなかった。「ズボンかと思つたら、ジャンパーだわ」「いやですねえ、私の上衣をひつぱつて」などとまるで喧嘩場のような。いく枝はしばらくもみあつていたが、やつと毛糸編物へ手を出した。それを両手でも